

小田原史談

第90号

発行所 小田原史談会
小田原市南町3の21

大衆演劇観劇考

柏木 次郎

(2)

去る二月十日小田原市民会館大ホールに於いて浅草喜劇の小田原公演第二回を開催し一応成功のうちに終了、入場者には心から感謝の意を表します。今回の公演は浅草喜劇而に喜劇大衆演劇普及化を目指しての公演であり二回を数えるに至った。大衆演劇は単に一般的なものではなく広く一般的に演劇を理解し、心から楽しむ唯一の伝統ある喜劇を普及化を願ひ各地で多方的公演活動され、ようやくにして一般大衆者に理解されはじめた。

その中で私供は無料奉仕にて普及化を進行させて成功のうちに有料に切換えて広く観劇してもらい多くの入場者に理解とゆとりをもちながら目的の一つでもさる従って公私に日常の諸生活の中でも演技は生きています。

ことは、決して過言ではありません、混雑する社会の中で大衆演劇は重要役割を担っている訳である。古代から現代に至る迄演技或いは演劇は一般大衆の中で心の中心に生きていたことは今日に至る迄の長い間親しまれて来たことに依って演劇が唯一の娯楽であったことも承知のことと思います。而して郷土芸能も完結的要素が深く未文明の中では非常に多く儀礼的要素から成立した演技(劇)も多く生まれ、たことは吾が郷土史の中で見られる様な常態である。雨につけ風につけ生まれた郷土芸能が今日に残っている郷土芸能、民俗芸能ではないでしょうか。芸能本来は入場者が少なくとも決して手抜きな演技ではないことは承知のことと思ひます。依って演じる

人も観劇する人も一体となつて一つの世界を作り出し混雑する社会であれ又平和な社会であつてもそれ相当の演技を時代の流れに依つて演じるものである。

従つて今日残っている民俗芸能も時代の様相が多分に含まれている。娯楽のな

が今日の見聞や舞の、演技に見ることが出来る。只言えることは現代の世に大衆演劇が少なくなつて来たことは確かである。

其の中で復活が言われて新宿や浅草で公演されては居るが、地方都市に至つては未だ普及復活が低下の一途をたどっている。残念なことと思ふ。吾が郷土に於いても祭や芸能が少なくなつて居ることは大変に残念である。

そのうちで喜劇集団(その会)は日夜、復活活動に専念し数回の公演を實行し当小田原も進出して来たが小田原には未だ大衆演劇には関心がなく入場者は

少ない、残念である。当劇団は未だ無名ではあるが浅草喜劇の伝統を伝え且つての大宮敏充先生の指導教示を受けた劇団員もあつます、そうした劇団員が小田原出身の酒井登志夫を励ましとして公演を實現、大衆演劇を多くの入場者に観劇してもらい本来の大衆演劇を目差して復活公演も実現の運びとなり、又有料無料料問わずして中味の勝負である。大衆演劇は特に中味で入場者を感じさせている笑い泣く大衆演劇大衆に親しまれ社会の平和維持の一助を成すものである。特に東京は江戸時代から大衆演劇は盛んであったことは言うまでもなく、しかし今日では低下の一途をたどつて居ることは残念である。今後大衆演劇の復活を願うものである。

くの人達に尊敬されて長く伝えてはしく又郷土芸能も同様に伝えて下さることを心から願う。混雑する社会情勢の中で大衆演劇を通じて世の平和を願ひつつ皆様の関心を此々に集めて、郷土芸能又は民俗芸能を復活させ唯一の娯楽であつたものを広く世間に視聴せしめるのをとつと大切に出来る社会になることを願うものであります。単に芸能と言ふなれば、心に残るもの、此の耳で此の目で観劇し人のつながりを大切にして伝統を守り伝え伝えて郷土の無形遺産を残さうではありませんか、而に私達は芸能を通じて社会文化を見直すようではないでしょうか。今後も芸能を通じ郷土の民俗遺産を知ろうではないでしょうか。(完) 次回は円福寺資料集を

源頼朝石橋山拳兵

八百年祭に想う

鈴木 平八

来る「昭和五十五年」がかの源頼朝が「蛭ヶ小島」で不遇の配流生活を十四才から始めて二十年間、即ち彼が三十四才となって、拳兵の大旗を「石橋山」へひ

「石橋山合戦」について小田原文庫より中野敏次郎先生著の「石橋山合戦前後」に詳細に親切に記述されて居りますので、私は頼朝方に味方した人々の中から、直接石橋山に関係ある人及びその家來の文三堂について少しく記しませう。

岡崎城(平塚市)主四郎義実は三浦介義明の四男であり、其の義実の子が即ち与一義忠であつて父と別れて真田城(平塚市真田)主となつた。

治承四年(一一八〇)八月廿三日の合戦当夜は暗黒の大暴雨であつた、源家の総大将頼朝から榮ある先陣の將として、指名された与一義忠は若冠廿五才の若武者である、その家來文三堂安は五十七才の老兵であつた。

真田城主与一義忠は、故國をあとに馬上の人となりいざ出陣の時文三堂安は残されては大変と主君の与一に願つて参戦した強者でもあつた。主従の二人は武運拙なく破れて戦場の露と消えて行きます。

与一義忠が生れて二才の頃から、文三堂安は主君と仰ぎ夜は胸にかゝえて、いたわり昼は肩にのせて終日可愛がり、早く立派な武者として育つよう願ひ、五、

六才に成長した時は早くも竹の小弓で打ち方を教え導き、馬にも乗せて馳らせて馬術をと、実に吾が子同様否それ以上の愛情をもった文三家安であった。

現在では真田城跡の本丸に当る所に、天徳寺と言う寺院があって、その境内に与一の墓及び神像と位牌が安置されています。

こゝでも咳と喘息の神様として附近の信仰が厚いようである、そして近くには真田神社もあります。

そして此所では真田与一とか、真田神社とかと記されていますが、石橋山では佐奈田と言う三字が使用されて居ります、家紋は同じく三浦氏使用の㊦でありますが、何の原因でこうした文字の違いが出来たのだろうか。

石橋山の佐奈田霊社の境内には、神奈川県指定の史跡「与一塚」があることは皆様御存知の通りであります。「相模風土記」によれば丘上に老杉樹あり囲一丈八尺、高六丈、樹前に碑あり長六尺、巾二尺佐奈田与一義忠墓、治承四庚子年八月廿三日夜と題す。こゝ稲葉美濃守正則の臣、田辺権太夫信吉の建つる所なりとなつて居りますが、与一塚の老杉も今は寂しく枯木となり、かつての盛木の姿

は残らず天高く延び尽した古木は若くして散った与一の雄々しい心を後世に残したのでせう。塚の周囲も今は雑木が茂り荒れれて居りますが来るべき八百周年祭には清らかな与一塚となる事です。

佐奈田霊社では毎月廿三日を例祭日とし、殊に八月廿三日は大祭とし、参拝者も多く、咳、喘息の神として又効果も大きく信者は、東京川崎横浜等々広く、日本全土に普及されて居ります。

そして其の与一塚、即ち与一義忠の家来の文三堂はどうであらう、その位置は石橋山の直ぐ南方下の「ねじり畑」そこは文三家安の主君佐奈田与一義忠と敵の勇将侯野五郎との一騎打ちの上になり、下になりして戦つた所で、小高い丘の上に文三家安の墓がある。

「相模風土記」に依れば豊三家安墳、熱海道側より石段を登ること三十段、上に松樹あり、周囲八尺、是を文三塚と呼び、側に碑を立、高さ六尺、佐奈田与一郎党文三墓、治承四庚子年八月廿三日夜と題す、田辺権太夫信吉、古領主稲葉美濃守正則の老臣の建る所なり、碑上覆屋あり忌日には参詣輩多し、家安(東鏡)には家康に作り(盛衰記)

には豊三を文三に作る。とあります。

文三堂も県指定の史跡となつて居り塚上の老松は過年惜しくも、松喰虫の被害により切り倒して今は無くその根本が残つて居る。

忠臣文三家安の墓を覆う家屋も今はくちて、その惨さが感じられます、この管理者は米神の正寿院であつて、こゝに文三家安の由緒の木像があります、台座裏に「法橋信作二代相州小田原住京仏師、宮田伸作政重五代宮田甚八郎忠重作之同藤五郎重吉、天保由午十月吉日、木工像宮殿」とあつて今はなき、文三家安の姿が思い出されます。

文二家安の子孫は今でも天徳寺の近くに住居して、姓を陶山(すやま)氏といつて居ります故に家安も陶山文三家安と云うのが本名

新年度を迎え、第一回の定例理事会を六月十三日(毎月第二土曜)午後一時、中央公民館に於て、新会長中野敬次郎先生を囲んで和氣あつたのちに、新年度の事業計画を左の通り決定致しました。

史談会

五十三年度事業計画

- 五月 会報発行
- 六月下旬 潮来、香取、成田空港方面史跡めぐり(一泊)
- 七月 会報発行
- 八月 講演会
- 九月上旬 沼津方面史跡めぐり

でありませう。陶山家の位牌には、治承四庚子歳知勝院保徳鉄心大居士陶山文三

国華長雲大居士藤巻文六がありまして、腰巻文六は弟である故、兄弟で石橋山の合戦で戦死したものと思はれます。

源頼朝は石橋山の折角の挙兵も、こうして涙ぐましい主従の働きもあつたにかかわらず、戦は破れてただ七騎、命から、海路房州へのがれ行く事が出来た。それから時は流れて八百

年、昭和五十五年を迎えるのです。石橋山の佐奈田霊社では過年も七百五十年祭も盛大に挙行了しました。来るべき八百周年祭もより盛大に施行する計画を進めて居ります、意義ある八百周年祭の成功を期待する次第です

十月 講演会

十一月 東京日野方面史跡めぐり

五月 会報発行
六月下旬 潮来、香取、成田空港方面史跡めぐり(一泊)
七月 会報発行
八月 講演会
九月上旬 沼津方面史跡めぐり

岡崎方面

史蹟巡りと下見体験記

香川 政治

或る春麗らかな日徒然に史蹟巡りのプリントの綴込を繕いて過ぎにし日の追想に耽つて居るうちフト目に止まった。それは四十七年十一月十二日十三日泊二日の岡崎方面史蹟巡りの下見に同行した時のことが脳裡に浮かび大変な一日であつたことを憶い出した。兎に角一泊二日のコースを一日で済ますという強行軍単に旅館や観光地の下見なら簡単であるが我々が行く所は観光バスが余り行かない

以上であります、これもバス会社の都合或は時期の関係等変更する場合がありますと思ひます。其の時は定例理事会で改めて協議す

以上であります、これ「を造って行きたいと思ひます。皆さんのどんな原稿でも結構ですどしどし御投稿下さい。

【編集部】からのお願ひです。

楽しい期待出来る「会報」を造って行きたいと思ひます。皆さんのどんな原稿でも結構ですどしどし御投稿下さい。

る事に致しますから御了承下さい。

尚当日の出席者は次の通り
中野会長、香川政治、杉崎正吾、額田喜代春、富田千秋、田村隆、鈴木貞嗣、沖山敏子、松岡俊子、松本孝作、相沢栄一、星野喜久雄、鈴木平八。

下見は何時も杉崎正吾氏の自家用車の奉仕を受け、この日もお願いし杉崎さん自から運転、同行は中野先生、三橋氏と今は亡き東海氏及び小生の一行四名。小田原七時出発松田インターより東名を一路西進袋井の可睡済までは順調であつた

がそれより先は土地不案内地図を頼りに目的地に車を進めるのだが、地図に無い道路が新設されておたたり一瞬戸惑いを起し道を間違えたり行き過ぎ、異方向に走るといふ悪条件も重なり形原温泉木村旅館に正午到着予定を遙かに越え時計の針は午後三時を指しており、下見の箇所も大部残っており旅館での打合せもソコソコに次の目的地に車を飛ばし、下見の終わった頃は晩秋の短い日はトッピーと暮れ、終わった所が岡崎郊外の為辺りは黒一色となり点々と外灯の灯が見える程度岡崎市内に向うのだが方向音痴の状態となり暗い為目標物も見えず、そこちと尋ね乍ら漸くにして岡崎市内にたどり着いた時は午後七時を過ぎており夕食も摂らず東名高速の入口を探がすに又一苦勞、ベテランの杉崎さんも市内を右往左往、漸く探し東名に入れば最早やお手のものハンドル捌きも鮮かに家路を指してまっしぐら、三ヶ日サービスエリヤで腹拵えも早々と再び車上の人となり、小田原に着いたのが真夜中の午前〇時を指していた。この日の走行距離は五百数十軒とのことであった。兎に角疲れた、食事以外は休憩なし、我々は人形のように車

に乗せられているだけで疲れたのだから車を運転する杉崎さんの体力消耗は大変であったらうと羨望としてその時の状況が臉に浮かび今改めて感謝すると同時にこの苦勞の甲斐あつて実施当日頗る順調に予定のコースを恙がなく完了した。これも下見をした結果で如何に下見が必要かを痛感し会員の皆さんの御理解と御協力をお願いして当時不参加の大方諸賢の参考にも貴重な会報の紙面を利用、当時のプリントをこゝに掲載する。

◎岡崎方面史跡めぐり
主催 小田原史談会
日時 昭和47年11月12日
13日 泊二日

講師 中野敬次郎先生
解説 中野敬次郎先生
一、コース

第一日午前七時藤湖集合
七時三十分出発、小田原、松田(東名高速に入る)、掛川、掛川城、袋井、可睡(昼食)、浜松、豊川、吉良、源徳寺、華蔵寺、形原温泉(宿泊)

宿泊旅館愛知奈蒲原市金原町形原温泉 木村旅館
電話(三三) 571-2124

第二日午前八時出発、岡崎、岡崎城、妙心寺(昼食)、大樹寺、大林寺、随念寺、岡崎午後三時三十分帰途、小田原(午後七時三十分

解散)
二、見学地

①掛川城(掛川市東海道本線掛川駅の北方)一名を雲霧城と呼ばれる平山城で丸天守に井戸があり敵が攻めよせると、この井戸から霧が湧いて城をつみ敵が近づくことが出来なかつたと云う伝説からこの名が生れた。この井戸は不覗の井戸と言つて日本第三の深さで四十四メートルあつて四国の丸亀、松山の二城の井戸につぐ深さである。今から四八〇年前の明応文亀の頃今川氏の重臣朝比奈泰照が築いたと云う。

戦国時代の掛川城合戦で有名で永祿十一年(一五六八)に今川氏真が徳三家康の大軍に包まれ今川氏の運命をかけた五ヶ月の籠城戦を行つたが、和議の末開城され、今川氏真は永祿十二年四月八日掛塚浦から船出して小田原の北条氏康のもとに走つて今川氏は滅んだその後山内一豊が天正十八年小田原役後に大構築して在城十年の間に小田原を見て做つて城壘と城下町を築いたと云うので知られている太鼓橋、殿館、城門が残っている。

◎可睡濟(袋井駅の北方)
遠州第一の曹洞宗の大師で万松山可睡濟と云うて寺の名を用いない。徳川家康

の信仰した名僧で寺の第十一代仙巖等勝和尚が、家康と浜松城で会見したとき席上で居眠りをして和尚を家康が見て笑つて「和尚を醒めし」と言つて以来「可睡和尚」と呼んだのでこれから寺号も可睡濟と改めたのである。

明治六年遠州秋葉山の三尺坊大権現をここに遷座したので秋葉総本殿可睡濟と名つた。

防の神として名高い。

◎源徳寺と吉良仁吉の墓(賀)
愛知県幡豆郡吉良町横須賀
信道山源徳寺は室町末期に建立された浄土真宗の古刹であつて任俠吉良仁吉の菩提寺で彼の墓があるので知られている。

仁吉は天保10年(一八三九)11月1日この地に生れ九。仁侠の道に入って清水の次郎長のもとで三年の修業をし故郷に帰つて二十六才で吉良家を張り乾分二十数人を従えた。

元治元年三月荒神山騒動が起きた時、次郎長に組して乱斗中に死んだ、四月八日で二十八才であつた。仁吉の仁侠一代に於いては東海任俠伝荒神山物語、次郎長三國伝などで知られ、この地出身の作家尾崎士郎の「人生劇場」も知られている。墓は次郎長が建てた。

④華蔵寺と吉良上野介良史の墓と遺品(吉良町岡山)
寺は片岡山華蔵寺と云つて臨濟宗妙心寺派である。吉良義史一族の菩提寺で義史の遺品や墓のあるので有名である。寺には貴重な文化財が多い。

。吉良家一族代々の墓、枯木山水観賞式庭園、吉良家三代木像、吉良義良書状並遺品、池文雅作品群。

⑤岡崎城(岡崎市康生町)
享徳元年(一四五二)三河守護代西郷弾正左エ門頼頼が築き大永四年(一五二四)徳川家康の祖父清康が入城して以来代々松平家(徳川家)の本拠の城となつた。別名竜ヶ城という、家康もこの城で天文十年十二月二十六日生れた。城域八〇二〇〇平方メートル、今は岡崎公園となつている。三層の天守閣(復元)東照宮産湯井戸、エナ塚などがある。

⑥岡崎市内の寺院と徳川、大久保両氏遺蹟

保家の墓石がある。
。大樹寺(浄土宗)岡崎市鴨田町

大樹寺の創建
大樹寺の由来を尋ねると大樹寺は松平市第四代親忠公(家康六世の祖)が文明七年(一四七五)勢眷愚底上人を開山として建立せられたものである。応仁元年(一四六七)秋井田野(現在岡崎市鴨田町向山、西光寺の辺り)にて親忠公と品野の暴徒との戦があつて多くの戦死者を出した。敵味方の亡魂鎮まらず日夜叫喚の声鳴動し疫病流行せる為親忠公はその近く敵部、福林寺(現在の豊田市敵部東町、阿弥陀院)に住せられていた徳望高き勢眷愚底上人に亡魂得脱の廻願を請うた上人は「山越の弥陀の画像」を掲げ七日七夜の念仏を修し、ねんごろに廻願せられた。その満願の日、亡魂の叫びも止み、疫病も癒ゆるに至つた。これにより親忠公は仏法の威神を感じ信仰肝に銘じて、報恩の為文明七年(一四七五)二月二十二日奏聞勅許を得て勢眷上人を開山したのである。上人は自ら成道山松安院大樹寺と名づけた。勢眷上人は親忠公の信仰篤く他に異なるを随喜し、本宗(浄土宗)の信仰の要を伝える

五重相伝を授けられた。これを結縁五重(浄土宗の信仰の要を在家の方に授ける)と云って在家の方に授けられた最初であって大樹寺は結縁五重の根源道場と称せられる所謂である。

親忠公はこの世、後の世永遠に真実に生き行く念仏の信仰にめざめ歡喜踊躍この精神を以て世に処し、浄土のこの世に願われんことを念願とし、子孫一門に傳えて代々浄土宗たることを誓い当寺を菩提寺と定め親氏(松平氏一代)以来、前三代の廟所を移して当寺に奉安し、爾來松平家八代(九代目が家康公)の廟所として現在も当寺に存している。

その後松平七代清康公が三河を平定した際七堂伽藍多宝塔(重文指定)の造営に着手し天文四年(一五三三)に竣工した。慶長七年(一六〇二)六月家康は六一五石朱印を寺に寄進、元和元年(一六一五)松平八代の廟所を寺内に完成した三代將軍家光は家康、秀忠の靈殿を建立すべく寛永十八年(一六四一)十一月大方丈、三門、総門、鐘樓を建立、三門樓上に掲ぐる「大樹寺」は後奈良天皇の宸筆である。樓上には釈迦三尊及び十六羅漢が祀ってある。かくして徳川將軍家の

菩提寺として明治に至る。大林寺浄土宗(岡崎市魚町)

松平広忠及びその母お春の方の墓がある。

險念寺浄土宗

松平清康夫妻の墓がある

父母菩提の為建立した。

形原温泉(金平町)

十五世紀の頃補陀寺の祖丘禪師と云う僧が夢のお告げによって発見した靈泉であった。併し何時の頃からか出なくなっていたが昭和二十年一月の地震で再び元の場所から湧出して温泉場として復活した。

泉質は単純純化水素泉、神経痛、糖尿病、動脈硬化症、心臓病に特效があるという。泉度十四度。

補陀禪師の馬頭観音と薬師如来像

形原温泉木村旅館に宿泊した際、我々は予想だにできなかった收穫を得た。と云うことは宿泊の時は傍に小さな寺がある位で気に止めず一夜を過ごし朝食前の散歩に補陀禪師に歩を進めた処其処の本堂に鎮座されている馬頭観音像と薬師如来像の二軀を拝観、そのお姿の壮嚴さに一驚これは二、三の者だけに借しい皆さんにも拝観して戴こう旨知らせ全員で拝観し皆立派な仏像に接しい土産となつたことであろう。

補陀禪師のしおりの一文をお借りして皆さんにお知らせしよう。

準国宝馬頭観音。薬師如来像

当寺の鎮守馬頭観音は寺伝に「神龜三年諸國巡錫の行基菩薩遇々遙かに聖武天皇御不例の由を聞かれ、その平癒祈願のため、石巻山の神木を得て、一刀三礼、精魂をこめて彫刻点眼された」三面六臂一木素地の六尺立像で、忿怒の外形には似せない優しさがありそれに柔かい浅い衣紋の彫り、均整のとれた肢体、左右四本の御手が半倒扇形に下向きよく上半身の安定感を保たせている等々、いかにも頭が下がる藤原期の老巧の逸作である。

明治の中葉まで村の氏神から、ゆかりの草競馬が古くされ、毎年の春祭りに奉納され、すばらしい人気に物凄しい出入を呼んだと云う。今はその馬場も補陀の湖底に……

薬師如来像も亦一木素地高さ三尺四寸です。大きく広い肉髻、したたるような温容、眉、眼、唇それにくよやかな両肩、比較的彫りの浅い、流れるような衣紋の線など、藤原期の特長を最もよく生かした滋呼掬すべき靈仏である。

「鉄道の隠語四方山嘯」

小田原史談会理事
額田喜代春

日本語を大きく分類すると、学問相にはいろ／＼と要素はあるが、「一般語」と「特殊語」或いは「専門語」の三つは分けられるでしょう。

そして、この特殊語の中には、方言と云って、日本国中何処でも通用しない、いわゆる日本語としての地域語が沢山あることは既に皆さん御存知の通りで、しかしまた地方には、職業とか、身分とか、階層とかいうように、区別にしたがって、つまり、社会的集団商売柄、いつの間にか、それぞれその職場の社会方言即ち鉄道のように職業用語になって日常業務に使われる言葉がいくつあか

現在こういう隠語(かくしことば)が全国では約二万語くらいあるというのを聞いて驚いた。

驚ろきついのに、外の社会のことは、別として私の専門である鉄道では、どんな隠語を使っているか、暇な時に拾ってみました。が、百五十語以上ありました。その中で面白そうなるものを

並べてみましょう。

アガリ……勤務を終って職場からはなれること

アケ……非番日(徹夜明けのこと)

アゲル……脱線した車両を旧になおすこと

アオル……速度を増す(つまり蒸気を煽る意味)

アカ……停止(赤い旗や灯が停止を意味する)

アタマ……列車の前頭部(人間の頭部のたとえ)

アタリ……停留車(突放した車両が当ること)

アベック……補助機関車をつけた機関車(二人連れの意味)

イ……一等又は一等車の略

イキテイル……電流が通じている(一般でも使っている)

ウケヤ……連結手の連結を受ける役目(受け屋の意)

ウヤ……汽車、電車等の運転休止の意

エンコ……汽車、電車等の運転不能のこと(座ってなるといふ俗語)

エンカン乗車 煙管乗車

又はキセル乗車 (キセル

の金具は両端にあつて中央がないので、これをもじってつけた)

オカマヲホル……追突(ウソから当たる意)

オチャズケ……残留車(残飯はお茶漬けにする)

オッコトル……脱線する

カオパス……乗車証なしで乗車すること(パスの代りに顔をきかせること)

カマ……蒸気機関車(ボイラーのこと)

カラス……鉄道職員(一部を除いて鉄道職員は年中黒い制服を着ている)

カイ……改札係のこの電報略語

カカ……貨物係のこと

キセル……エンカン乗車と同じで、つまり中間無礼又は見送人と出迎人のある両端だけ二等切符で後は三等切符の客

キル……汽車、電車の車両を切りはなすこと

(つづく)

会報第86号記事の訂正の御知らせ

北条時代の曹洞禪師の建立と僧侶群の記事中「居神社の所在地が南町四丁目となつていますが、城山四丁目」が正しいので訂正致します。失礼致しました。

編集部